



「あなたの話をしてほしいな」と、ミサキが言った。

「ぼくの話？」

「そう。どんなところで生まれて、どんなふうに着たか」

「いいよ。それはつまり卵なんだ」

「卵？」

「そう、卵を思い浮かべて」

と、ミサキは繰り返して、それ、あなたの話を聞くのに重要なこと？ と、質問した。

「もちろん」

と、ぼくは答えた。

卵を思い浮かべること。それは最重要、最優先のことだ。そこからでしか、ぼくの話はできない。

「浮かべた」

「どんな卵？」

「えっ？ 白いふつうのニワトリの卵だけど……。それじゃあ、だめだった？ ダチョウの卵とか、そんなほうがよかったのかなあ」

「いや、いいよ。白いニワトリに卵。頭のなかにあるよね？」

「うん。ある」

ミサキはまぶたを閉じてそう言った。

「じゃあ、始めよう。ぼくは、卵のなかに住んでいたんだ」「卵のなかに……」